

大島商船高等専門学校

目 次

I	選択的評価事項に係る評価結果	2-(15)-3
II	事項ごとの評価	2-(15)-4
	選択的評価事項A 研究活動の状況	2-(15)-4
	選択的評価事項B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況	2-(15)-6
<参 考>		2-(15)-9
i	現況及び特徴（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）	2-(15)-11
ii	目的（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）	2-(15)-12
iii	選択的評価事項に係る目的（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）	2-(15)-14
iv	自己評価の概要（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）	2-(15)-16
v	自己評価書等	2-(15)-17

I 選択的評価事項に係る評価結果

大島商船高等専門学校は、大学評価・学位授与機構が定める「選択的評価事項A 研究活動の状況」において、目的の達成状況が良好である。

大島商船高等専門学校は、大学評価・学位授与機構が定める「選択的評価事項B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況」において、目的の達成状況が良好である。

当該選択的評価事項Bにおける主な優れた点として、次のことが挙げられる。

- 商船系の高等専門学校の特色を活かした講座が実施されるなど、公開講座及び出前講座は多岐にわたり、いずれの講座においても参加者のニーズを十分に満たしており、目的に照らした活動の成果が十分に上がっている。

II 事項ごとの評価

選択的評価事項A 研究活動の状況

A-1 高等専門学校の目的に照らして、必要な研究体制及び支援体制が整備され、機能しており、研究の目的に沿った活動の成果が上がっていること。

【評価結果】

目的の達成状況が良好である。

(評価結果の根拠・理由)

A-1-① 高等専門学校の研究の目的に照らして、研究体制及び支援体制が適切に整備され、機能しているか。

研究活動に関する目的「大島商船高等専門学校の教育・研究分野や共同研究・受託研究の成果などの情報を広く提供し、地域社会との連携を図り、もって本校の充実、発展に資すること」を達成するため、目標として「(1) 地域の特性と周辺環境を意識した特色ある研究を推進し、科学技術相談を行う」、「(2) 練習船などの商船高専独自の施設と人材を活かした研究を行い、公開講座や出前授業を通して、地域の生涯学習相談を行う」及び「(3) 研究活動を通して教育の質向上に努める」の3項目が掲げられている。

目標(1)については、地域協力センターで研究分野を商船、機械等の8分野に分けて科学技術相談を受け付けている。また、各種交流会への参加や講演・パネル発表を行い、情報交換や共同研究への展開を図っている。目標(2)については、地域協力センターの下に研究体制が整備され、研究活動を通じた商船系の高等専門学校としての特色を活かした「ヨット教室」など多種の公開講座や出前講座が行われている。目標(3)については、校長、副校長、事務部長で構成される校長室により研究に対する予算措置の支援が行われているほか、異なる専門の教員間の研究を有機的に結び付けるために「学科を超えた技術の相互理解を深めるための研修」が実施されている。

また、目標を達成するため、地域協力委員会の下に設置された地域協力センター、練習船運航委員会、校長室などを中心とした支援体制が整備されている。

これらのことから、研究の目的に照らして、研究体制及び支援体制が適切に整備され、十分に機能していると判断する。

A-1-② 研究の目的に沿った活動の成果が上げられているか。

目標(1)に関しては、共同研究を通じた研究として、「船用ディーゼルエンジンの大気保全に関する研究」等が練習船「大島丸」を利用して行われており、「バイオマスからの高付加価値製品の実用化開発」では、瀬戸内海で発見された新規微生物ラビリンチュラを用いるなど地域の特性を活かした研究が行われている。また、練習船「大島丸」を用いた災害対策のための研究も行われており、目的に沿った成果が上がっている。

目標(2)に関しては、公開講座、出前授業、体験学習が行われており、商船系、工学系、文化系など多岐にわたる分野で実施されている。その中でも特に、平成18年度に実施された公開講座「幕末講座・幕長戦争大島口を巡る一海と陸から見る」は、練習船「大島丸」が活用されており、一般科目担当教員が周防大島の幕末史跡を巡る内容で実施するなど、研究活動を活用した成果が上がっている。

目標(3)に関しては、研究活動を通じて教育の質の向上に努めた結果として、「実学重視のeラーニングサイト構築と展開—即戦力となる実践技術者養成を目指して」及び「海事技術者のキャリア育成プロ

グラム「強い職業意識と高い職業能力を備えた海事技術者の育成」は、文部科学省の平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に採択されるなど、成果を上げている。

これらのことから、研究の目的に沿った活動の成果が十分に上げられていると判断する。

A-1-③ 研究活動等の実施状況や問題点を把握し、改善を図っていくための体制が整備され、機能しているか。

目標（1）及び（2）に関しては、地科学技術相談や生涯学習相談に関する研究活動等の実施状況の把握と改善を図っていくため、域協力委員会の下に地域研究センターが設置されており、公開講座の広報の方法や開催場所について改善を図るための審議を行うなど機能している。

また、目標（3）に関しては、校長室が整備されており、教員の教育活動や改善報告などを把握し、また、現代GPに関する成果報告会を開催するなど機能している。

これらのことから、研究活動等の実施状況や問題点を把握し、改善を図っていくための体制が整備され、機能していると判断する。

以上の内容を総合し、「目的の達成状況が良好である。」と判断する。

【優れた点】

- 商船系の高等専門学校独自の研究施設である練習船を利用し、地域の特性を踏まえた環境にやさしい技術や災害対策を目指した研究が行われているなど、商船系の高等専門学校の特色を活かした取組がなされている。

選択的評価事項B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況

B-1 高等専門学校の目的に照らして、正規課程の学生以外に対する教育サービスが適切に行われ、成果を上げていること。

【評価結果】

目的の達成状況が良好である。

(評価結果の根拠・理由)

B-1-① 高等専門学校の教育サービスの目的に照らして、公開講座等の正規課程の学生以外に対する教育サービスが計画的に実施されているか。

正規課程の学生以外に対する教育サービスの目的として、「1. 小中学生、一般市民を対象とした公開講座を推進する」、「2. 図書館等の開放、研究施設の開放を行う」、「3. 生涯教育やリカレント教育等の学習の場を提供するためのプログラムを整備する(高齢者を対象としたIT講習会の開催等)」、「4. IT要素技術の講習会実施と地域環境整備(IT関連)への働きかけを行うことによって地域への貢献をする」、「5. 出前授業等を行い小中学生との交流を図る」が掲げられている。

これらの目的に照らして、目的(1)に関しては、「古代日本人と外国語」、「おもしろロボット」等の公開講座及び出前授業が毎年計画的に実施されており、これらの公開講座及び出前授業は、地域協力委員会が中心となり選定や受講者募集、実施状況、次年度に向けての改善等について検討が行われている。

目的(2)に関しては、図書館は、平日は20時まで、土曜日は13時から17時まで開館しており、一般市民に開放されている。また、オープンキャンパスや商船祭では、研究室が公開されており、卒業研究の説明等が行われている。

目的(3)及び(4)に関しては、学内において「パソコン環境設定講座」等が実施されているほか、地域からの要請等により「周防大島町IT講習会」や国際交流特別文化講座として「アフリカ系アメリカ文学の魅力」が開講され、教員を講師として派遣するなどの人的協力が行われており、連携が図られている。

目的(5)に関しては、「船はどうして浮いているの? どうして走るの?」などの出前授業が行われており、小中学生との交流が図られている。

これらのことから、教育目的のサービスに照らして、公開講座等の正規課程の学生以外に対する教育サービスが計画的に実施されていると判断する。

B-1-② サービス享受者数やその満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。また、改善のためのシステムがあり、機能しているか。

目的(1)に関しては、公開講座の受講者に対して、満足度に関するアンケートが実施されており、すべての公開講座で80%以上の受講者が満足しているとの結果が得られている。改善のためのシステムとしては、地域協力委員会でアンケートの結果、満足度の低かった講座や受講者の少なかった講座の内容等について審議が行われるなど、改善を図るための取組が行われている。

目的(2)に関しては、図書館が一般市民に開放されており、近年では継続的に利用されているほか、研究室についても一般市民に公開することにより学校の広報効果が上がっている。改善のシステムとして、図書館については、図書館運営委員会において利用率向上及び公開講座とのタイアップ等について審議が

行われている。研究室については、教務委員会により、オープンキャンパスの申し込み状況の確認が行われている。

目的（3）に関しては、パソコン講座等の受講者に対してアンケートが実施されており、受講者の満足度はおおむね良好であるという結果が得られている。また、目的（4）に関しては、受講者数が安定しており、地域の行事として定着している。改善のシステムとして、地域協力委員会のほか、講習会の主催者側の担当者、講師として派遣された教員及び事務職員の担当者による意見交換会が実施されており、その結果、会場の変更が行われるなど、パソコンの利用環境が大幅に改善されている。

目的（5）に関しては、出前授業を実施した小中学生を対象としたアンケートが実施されており、アンケート結果から、満足度は高いものとなっている。改善のためのシステムとしては、地域協力委員会でアンケート結果を分析し、次年度以降の内容等について審議が行われるなど、改善を図るための取組が行われている。

これらのことから、サービス享受者数やその満足度等から判断して、活動の成果が上がっており、また、改善のためのシステムがあり、機能していると判断する。

以上の内容を総合し、「目的の達成状況が良好である。」と判断する。

【優れた点】

- 商船系の高等専門学校の特色を活かした講座が実施されるなど、公開講座及び出前講座は多岐にわたり、いずれの講座においても参加者のニーズを十分に満たしており、目的に照らした活動の成果が十分に上がっている。

<参 考>

i 現況及び特徴（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）

1 現況

(1) 高等専門学校名

大島商船高等専門学校

(2) 所在地

山口県大島郡周防大島町大字小松1091-1

(3) 学科等の構成

学科：商船学科 電子機械工学科 情報工学科

専攻科：海洋交通システム工学専攻

電子・情報システム工学専攻

(4) 学生数及び教員数（平成19年5月1日現在）

①学生数

準学士課程	1	2	3	4	5	実生	計
商船学科	46	38	37	38	40	32	231
電子機械工学科	41	44	42	43	41		211
情報工学科	40	50	37	35	42		204
計	127	132	116	116	123	32	670

専攻科課程	1	2	計
海洋交通システム学専攻	2	6	8
電子・情報システム工学専攻	7	9	16
計	9	15	24

②教員数

区分	教授	准教授	講師	助教	助手	計
一般科目	6	6	2	0	0	14
商船学科	7	5	1	6	0	19
電子機械工学科	5	4	1	1	0	11
情報工学科	4	3	2	1	1	11
計	22	18	6	8	1	55

2 特徴

・ 沿革

本校は、明治30年10月1日、山口県大島郡立大島海員学校として創立され、明治34年に山口県立となり、その後の時代の進展とともに、昭和14年8月に国立大島商船学校、昭和26年4月に国立大島商船高等学校と改称、昭和42年6月1日、法律第18号「国立学校設置法の一部改正」により、大島商船高等専門学校となった。平成19年、学校創立110周年、高等専門学校として40周年を迎えるに至る。

高等専門学校発足時（昭和42年）には、航海学科及び機関学科（2学科1学年2クラス、1クラス定員40名、1学年定員80名）でスタート、翌年（昭和43年）機関学科を1学年2クラス（1学年3クラス、1クラス定員40名、1学年定員120名）となる。メカトロニクス分野の発展により昭和60年に機関学科の1クラスを電子機械工学科に改組し、航海学科、機関学科、電子機械工学科（3学科1学年3クラス、1学年定員120名）となる。さらに船員制

度近代化と合理化、情報技術の発展に伴い昭和63年に航海学科と機関学科を統合して商船学科とし、新たに情報工学科を設立して、商船学科、電子機械工学科、情報工学科（3学科1学年3クラス、1学年定員120名）に改組した。平成16年4月独立行政法人国立高等専門学校機構法により独立行政法人へ移行し、現在に至る。さらに本学における更なる高度な教育の充実を目指して平成17年度には商船学科を母体とした海洋交通システム学専攻及び電子機械工学科と情報工学科を母体とした電子・情報システム工学専攻の2専攻で構成される専攻科が発足し、平成19年3月には電子・情報システム工学専攻の第一期生全員が学位（学士）を取得して課程を修了した。

・ 準学士課程教育の特徴

準学士課程5年間の教育課程において、低学年では「豊かな教養と広い視野を身に付けるため」の初段階として一般科目を低学年に多く配置、学年が上がるに従って各学科で必要な専門科目を徐々に増やす「深く専門の学芸を教授する」カリキュラム構成にしている。また各学科とも1年生より実験実習を実施しており、その内容は専門科目のみならず現代社会において必須である情報教育も含まれ、「職業に必要な能力の育成」の観点に沿ったものとなっている。またインターンシップへの取り組みを重視し、平成18年度では多くの学生が参加している。

準学士課程では、課程を卒業する学生の約20%が進学、80%が就職であり、就職企業先では大半が学科の教育課程に合致した企業であり、進学先では商船学、理工学分野の大学および専攻科であり準学士の教育課程が十分機能していることがわかる。

・ 専攻科課程教育の特徴

専攻科課程では、高度な専門知識と技術を教授し、創造性豊かで技術革新と社会情勢に対応できる高度な海運管理者・研究開発技術者を育成するために設置され、海洋交通システム学専攻（海洋系）では、すでに乗船実習を修了した学生が、海上のみならず陸上の国際物流の管理業務を担うことができる管理技術者の育成を目指したカリキュラム構成としている。また、電子・情報システム工学専攻（工業系）では、メカトロニクス分野および情報分野における研究開発技術者の育成を目指したカリキュラム構成としている。またボランティア活動をカリキュラムに組み入れ、学生のボランティアに対する意識の向上を図っている。さらに座学とは別に校内での専攻科の行事や研究発表会等においては学生自身での企画運営を基本としており、学生には自ら行動することにより自身の社会人としての自覚を持たせる試みを行っている。平成19年3月には工業系第1期生の修了生を輩出し、修了生全員が学位（学士）を取得していることから教育課程が十分機能していることがわかる。

ii 目的（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）

「我が国のものづくりの技術基盤を支え、質の高い専門性を有し、創造性に富み、国際感覚を身につけた視野の広い実践的技術者を育成する」ことを養成すべき人材像として、本校では以下に示す教育理念、目標を掲げている。

1. 教育理念

本科5年間（商船学科は5年6ヶ月）における一貫教育によって海洋に育まれる心豊かでたくましい海運技術者並びに創造性豊かな工業技術者の育成を目指す。さらに専攻科では高等専門学校の基礎の上に、更なる高度な専門知識と技術を教授し、技術革新と社会情勢に対応できる海運管理者及び工業技術者を育成することを目指す。

2. 教育目標

2. 1 本校の教育目標

準学士課程及び専攻科課程の学生に対して以下に示す教育目標を掲げ、教育を行っている。

- (1) 豊かな教養と国際感覚を身につけた、視野の広い技術者を養成する。
- (2) 協同の精神と責任感を培い、集中力・忍耐力を養い、指導者として必要な能力を育成する。
- (3) 探究心を養い、身体を鍛え、先人の遺産を学び、新技術を創造できる能力を育成する。

2. 2 準学士課程各科の教育目標

(1) 一般教育課程

一般教育課程では「広く社会的視野に立って物事を理解できる教養豊かな国際人となること、また専門的知識や技術を身につけるために必要な基礎知識を修得すること」を教育目標としている。この教育目標を実践するため教養教育に関する目標は、「基礎科目における学力の底上げとその向上」「国際社会に通用するコミュニケーション能力」の二つを掲げている。前者については、一般理数系科目を特に低学年を重視して配置するとともに、社会に出るための準備段階として、技術者としての倫理を身に着けるための社会系の科目も高学年で開講している。後者については、全学科とも特に英語に重点を置き、オーラルコミュニケーションを含んだ基礎から工業英語に至るまでの教育を行っている。さらに、近年のアジアの発展に着目し、高学年に第二外国語として「中国語」「ハングル」も取り入れている。

(2) 専門教育課程

専門教育では、基礎知識の習得や実験・実習の重視に加え「創造性豊かで高度な幅広い、ものづくり基盤を支える技術者の養成」を目標としている。各学科とも創造力をつける訓練としての科目として、「創造演習」（商船学科・情報工学科）、「創造設計」（電子機械工学科）を取り入れている。また平成18年度からのカリキュラム改定により高学年に「自学自習」として、その教科の課題のみでなく、時間を有効利用するように自分で工夫して勉強する時間を設置している。本科の集大成として、5学年で行う「卒業研究」において、研究の進め方、論文の書き方及び発表方法など、技術者として社会に出るための準備が体系的に実施されている。

(2-1) 商船学科

商船学科は航海及び機関コースの両コースが設置されており学科の目標として「広い視野と実践的な能力をもつ海技士を育成すること」を掲げている。そのために、船舶の安全運行に必要な専門知識を習得し、実践の場として、練習船で海外や国内各地を訪問しながら、自然や人と触れあい、楽しく充実した航海実習が行われている。

(2-2) 電子機械工学科

電子機械工学科では、学科の目標である「電子電気と機械の2分野を中心とし、これに情報処理・計測制御を含めた幅広い学習を基礎理論と実験実習との両面から実施する」に沿い、電子・機械分野だけでなく、情報系や制御系の講義科目と実験実習が積極的に開講されている。

(2-3) 情報工学科

情報工学科では、コンピュータや情報処理に関心を持っている者に情報処理と情報通信の原理と応用について系統的に学べる環境を提供している。学科の目標では「豊富なIT技術をもとにした視野の広い応用能力の養成、グループリーダとしてのコミュニケーションとプレゼンテーション能力の養成、柔軟で創造的なシステムデザイン能力の養成」を掲げ、高度情報通信技術社会に対応できるエンジニアを育成するための対応が取られている。

以上のように、本校の準学士課程3学科は、学科ごとにそれぞれの特色を出しつつ、本校の教育に関する目的を達成するための目標を掲げ、教育を行っている。

2. 3 専攻科の教育目標（専攻別、共通を含む。）

専攻科では本校教育目標を基礎として以下の教育目標を掲げ、優れた専門性と豊かな人間性を有する海運管理者と工業技術者の育成を目指している。

(1) 海洋交通システム学専攻

- 海洋を中心とした国際物流管理分野及び海事関連分野で活躍できる海運管理者の育成

(2) 電子・情報システム工学専攻

- 電子・情報システムに関する高度な研究開発ができる実践的開発技術者の育成

(3) 一般教養課程及び専門共通科目

- IT教育により、高度なコンピュータ援用能力を持つ技術者の育成
- 国際化教育により、語学力や文化的教養を持つ技術者の育成
- 福祉や環境に常に興味を持つ技術者の育成

以上のように、本校の専攻科課程2専攻は、専攻ごとにそれぞれの特色を出しつつ、本校の教育に関する目的を達成するための目標を掲げ、教育を行っている。

2. 4 卒業・修了時に達成される基本的な成果

本校の教育課程は、準学士課程および専攻科課程の教育目標に沿って系統的に配置されており、準学士課程入学より、5年生を卒業するまでの5年間（商船学科は5年6ヶ月）の学修と専攻科2年間の学修によって以下の基本的な成果を身につけることができる。

(1) 準学士課程

一般教育課程では、広く社会的視野に立って物事を理解できる能力、コミュニケーション能力、専門的知識や技術を身につけるために必要な基礎知識、専門教育課程では一般教育課程を基礎として、安全に関する意識（商船学科）、実験・実習の重視及びものづくり基盤を支える創造性、プレゼンテーション能力、ITを活用する能力（電子機械工学科、情報工学科）などを身につけることができる。

(2) 専攻科課程

準学士課程を基礎として、専門科目の履修より発展的な専門知識・技術を身につけることができる。特別研究、特別実験および演習の履修や研究成果の校内外での発表により創造的研究開発能力を身につけることができる。またボランティア体験を通して地域への社会貢献や活動の意義を体得できる。

iii 選択的評価事項に係る目的（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）

1 選択的評価事項A「研究活動の状況」に係る目的

本校が位置する周防大島は、周囲を瀬戸内海に囲まれ、島内全人口約23,000人のうち、65歳以上の老人は43%を占め、全国平均の17%に比べてはるかに高い。しかし、多くの高齢者が島の沿岸等で漁業を営んだり、山の斜面で特産物の大島みかんを栽培したりするなど、元気に働いており、生涯現役の島といわれている。また、気候も温暖で、1日のうちで4時間以上太陽の照る日が2000年を例にとると233日あり、県庁所在地の山口市に比べて、32日も多い。このような立地条件の中で本校は商船高専として、商船学、工学、そして一般科目といった教育研究内容が大きく違う多彩な人材と商船高専独自の研究施設が揃っているという点が本校の特色でもある。更に、この様な人材と施設を有機的に結びつけるための工夫がなされている。

上記のような地域の特性と学校の特色を鑑み、県東部唯一の工業系学科を持つ高等教育機関として、教員は教育内容を技術の進展と社会の要請に対応させるために研究活動を行うことを基本に、以下のことを研究活動の目的としている。

大島商船高等専門学校の教育・研究分野や共同研究・受託研究の成果などの情報を広く提供し、地域社会との連携を図り、もって本校の充実、発展に資することを目的とする。

これらは、本校が地域社会との連携を図るために設置した地域協力委員会の目的として掲げてある（資料A-Ⅲ-1-1）。この目的は、独立行政法人国立高等専門学校機構法第三条「機構の目的」及び第十二条「業務の範囲等」に一致するものである（資料A-Ⅲ-1-2）。

上記の目的を達成するために、以下の(1)～(3)を目標として掲げている。これらは地域協力委員会の基に設置した地域協力センターの具体的業務として公表されている（資料A-Ⅲ-1-1）。

(1) 科学技術相談

地域の特性と周辺環境を意識した特色ある研究を推進し、科学技術相談を行う。

(2) 生涯学習相談

練習船などの商船高専独自の施設と人材を活かした研究を行い、公開講座や出前授業を通して、地域の生涯学習相談を行う。

(3) その他

研究活動を通して教育の質向上に努める。

2 選択的評価事項B「正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況」に係る目的

大島商船高等専門学校（以下、本校）は、山口県東部の屋代島（通称 周防大島）に位置し、平成19年度に創立110周年を向かえ、地域と長い歴史を持っている。本校は船員養成のみならず工業技術者育成にも力を注いでおり、そのための教授陣および設備が整っている。その中で、長い歴史を共有する地域への貢献を目的として以下の事項を挙げて実施している。

1. 小中学生，一般市民を対象とした公開講座を推進する。
2. 図書館等の開放，研究施設の開放を行う。
3. 生涯教育やリカレント教育等の学習の場を提供するためのプログラムを整備する。（高齢者を対象としたIT講習会等の開講等）
4. IT要素技術の講習会実施と地域環境整備（IT関連）への働きかけを行うことによって地域への貢献をする。
5. 出前授業等を行い小中学生との交流を図る。

（本校 中期目標より）

以上の貢献により、本校が地域に受け入れられ、地域とともに発展してゆくことを目標として教育サービスの提供を行っている。

iv 自己評価の概要（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）

1 選択的評価事項A 研究活動の状況

地域の特性と周辺環境を意識した特色ある研究を推進し科学技術相談を行う、練習船などの商船高専独自の施設と人材を活かした研究を行い公開講座や出前授業を通して地域の生涯学習相談を行う、を研究活動の目的とし、この目的達成のため、地域協力センター、練習船運航委員会、校長室などの研究支援体制がある。

この体制のもと、温和な気候と美しい環境が特徴である地域の特性を考え、環境に優しい技術を目指した研究が多く行われている。また、高齢化が進み地震などの災害時には大きな被害が発生することが予想される地域にあり、商船高専独自の施設である練習船を利用した災害対策に関する研究が行われている。また、地域協力センター活動の一つの柱である「生涯学習相談」は、地域住民に対する公開講座、小中学校を対象とした出前授業及び体験学習という形で提供している。この中で公開講座数は全国の高専の中でも最も多い部類に属し、その分野は商船学や工学にとどまらず、文化系や体育系の公開講座も行われ、学校をあげて多くの教員が研究成果を地域に還元する活動がなされている。更に、現代的教育ニーズ取組支援プログラムにおいて、平成18年度に2件が採択されるなど、研究成果を教育に結びつける活動が非常に活発に行われ、外部からも高い評価を得ている。

研究目的の一つである科学技術相談においては、研究活動等の実施状況の把握と改善を図っていくための体制として地域協力委員会のもとに地域協力センターを設置し、地域協力委員会にて運営に関して審議をしている。校長室関係の予算では、成果発表会を開き、予算が効果的に使われたかをチェックしている。研究目的のもう一つである生涯学習相談においては、様子をホームページ上で公開し、受講者に対してアンケートを行い、成果や問題点の把握に努めている。

2 選択的評価事項B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況

本校は地域と長い歴史を持っており、船員養成や工業技術者育成のみならず長い歴史を共有する地域への貢献が非常に重要である。よって地域貢献を目的とした小中学生、一般市民を対象とした公開講座や小中学生を対象とした出前授業の実施を行っている。その中で公開講座は22講座、出前授業は9授業を開催している。参加者のアンケートにより内容的にも満足していることが伺える。

本校の公開講座及び出前授業は、地域協力委員会で講座の内容、実施時期及び参加費用等が審議される。また参加者のアンケートの集計等も委員会が行い、次回への改善の参考資料としている。

また、地元周防大島町教育委員会が主催するIT講習会への教員の講師派遣及びアシスタントとしての専攻科生の派遣、さらに近隣の柳井市が行う公開講座への教員の講師派遣など、近隣市町村との連携も増えつつある。

以上のことにより、本校では学生以外の教育サービス、特に地域連携を目的とした多数の公開講座および出前授業を開講していることがわかる。

v 自己評価書等

対象高等専門学校から提出された自己評価書本文については、機構ウェブサイト（評価事業）に掲載しておりますのでご参照下さい。

機構ホームページ <http://www.niad.ac.jp/>

自己評価書 http://www.niad.ac.jp/sub_hyouka/ninsyou/hyoukahou200803/kousen/jiko_s_oshima.pdf